

公安部 検察官事務取扱 検察事務官

国家公務員一般職（大卒程度）採用・スポーツ系学部出身・入庁12年目・男性

01 PAST

——捜査の最前線で、自分自身を武器にする

Q：自分のどのような性格が、現在の業務に活かされていると思いますか。

A：私は「人と話すこと」が純粋に好きであり、日々の業務の中では特に取調べでその性格が活かされていると感じています。取調べの基本は、まず相手の言葉にじっくり耳を傾けることですが、時には自分の経験談を交えて語りかけることで、心の壁が取り払われ、より深い供述が得られることもあります。相手の懐に飛び込み、本音を引き出すこのアプローチは、複雑な事案の真相解明において欠かせないプロセスだと確信しています。今後も対話を重ねることで、揺るぎない事実に一歩でも近づけるよう努めていきたいです。

Q：他部署での経験と現在の業務はどのように関連がありますか。

A：以前、当庁特別捜査部に在籍していた際に、搜索差押えや逮捕といった強制捜査の最前線を経験しました。そこで得たデジタルフォレンジック（電子証拠の解析）に関わる知識は、高度化する現代の犯罪を捜査するにあたって、私の大きな武器となっています。

「自分でも気づいていなかった強みが、仕事を通じて少しずつ見えてきます。

検察事務官としての『自分探しの旅』は、まだ始まったばかりです。」

——妥協を許さない、真摯な姿勢

Q：現在の業務に従事する中で、やりがいを感じる瞬間はありますか。

A：ある窃盗事件の書類を精査していた際、被疑者の頻繁な暗号資産取引の履歴が残っていることに違和感を覚えました。別罪での立件可能性を警察に提案し、さらなる捜査が行われた結果、被疑者はその別罪により起訴されたのです。**自分の小さな気づきが社会正義の実現へとつながった**ことを実感した時、非常に大きなやりがいを感じました。

Q：真実を明らかにする過程で、被害者の方や御遺族の方の痛みに触れなければならない場面もあります。その際、どのような思いで職務を全うされていますか。

A：私は、**真実を届けることが、被害に遭われた方々にとっての一つの救いの形である**と信じています。捜査の中で被害者の方や御遺族の方からお話を伺う際、どうしても辛い記憶を思い出していただかなければならないことに、今でも胸が締め付けられるような心苦しさを感じます。しかし、そこで立ち止まるのではなく、**勇気を出して語ってくださった言葉を揺るぎない証拠へと変え、事件の真相を明らかにする**。検察庁職員として、被害者の方や御遺族の方の無念に報いるために、**私たちはその責任を果たしていかなければなりません**。これからも、一つ一つの言葉に込められた重みをしっかりと受け止める姿勢を決して忘れずにたいです。

「被害に遭われた方の心に寄り添い、次の一步を支える。それもまた、私たちの果たすべき大切な役割です。」

——知識と経験で切り拓く、副検事への道

Q：業務を通じて得たスキルを、今後のキャリアにどう生かしていきたいですか。

A：**複雑な情報を整理し、把握する力**をあらゆる現場で役立てていきたいです。数多くの事件を並行して担当する中で、様々な捜査で得た膨大な情報を瞬時に整理し、正確に把握して次に必要な捜査につなげていく力が磨かれました。これは、迅速かつ正確な判断が求められる検察庁での業務において、強力な武器になると確信しています。今度、どのような困難に直面しても、このスキルを生かして**事案の核心を捉え、検察の使命である社会正義の実現に貢献**していきたいと考えています。

Q：今後、どのように活躍し、検察庁へ貢献していきたいと考えていますか。

A：私は近い将来、「**副検事**」への任官を目指しています。法律や判例について学び続けることはもちろん、**AIをはじめとする最新テクノロジーへの知見も深め**、巧妙化する現代の犯罪に毅然と立ち向かっていきたいと考えています。また、検察事務官としてこれまで培った、関係各所との調整力も、副検事として働く上で生かしたいと考えています。**検察事務官から副検事に任官する人間だからこそできる、自分らしい捜査のスタイル**を確立し、冷静な分析力と誠実な人間性を兼ね備えた捜査官として活躍したいです。

「**検察事務官としての経験を、検察官としての未来へ。豊富な知識と経験を持つ、信頼される副検事を目指して、これからも自己研鑽を続けていきたいです。**」